

外国人に難しいスルとシテイルの使い分け

谷口秀治

0. はじめに

一般に、スル（あるいはシタ）とシテイルという二つの文法形式は、動作の動きが完結的か継続的かといったアスペクト的対立を成すものとされ、すでに多くの論考が試みられている。とくにシテイルについては、動作の進行や結果の残存など、そのアスペクト的意味・用法がかなり明確にされてきたといえる。そして、このような研究成果は、日本語教育の現場においても有効な形でとり入れられているわけであるが、実際に外国人学習者の日本語に接していると、上級者であっても、スル（またはシタ）で表すべきところをシテイルで表したり、また、逆の場合もあつたりと、スルとシテイルの使い分けはわれわれ日本語話者が想像する以上に難しいように思われる。

そこで、本稿では、そうしたスルとシテイルの使い分けについて、非日本語母語話者によくみられる誤用例も参考にしつつ、その分類と分析を試みたいと思う。尚、スル（またはシタ）とシテイルの問題には、従属節内における対立もよく論題となるが、ここでは、その使い分けの要因がより複雑と思われる、主文末におけるスルとシテイルの問題を中心に扱うものとする。

1. 進行を表す動作の基準点があいまいな場合

シテイル形式のアスペクト的意味のひとつに、次のように動作の進行を表す用法があることは、すでによく知られるところである。

(1) A: あなたはいま何をしていますか?

B: 居間でテレビをみています。

そして、シテイルが進行の意味を実現するためには、通常上の例の「いま」のように、動作の基準点が存在することが前提となる。しかしながら、実際の日本語の会話においては、その基準点が必ずしも明示的に示されるとは限らない。たとえば、ごく日常的な日本語の会話に、

(2) A: どこで会いましょうか?

B: 駅の前に立っていますので。

のようなシテイルの使われ方があるが、このシテイルもアスペクト的には動作の進行を表すものといえる。しかしこの場合、その動作「立っている」の基準点は明言化されておらず、その設定は、文脈上「自分と相手が出会う時点」という、いわば当事者間の暗黙の了解を基になされていると考えられる。そして、日本語学習者の日本語を観察していると、

このように進行を表す動作の基準点があいまいな場合、シテイルが使いにくいようであり、かなり日本語のできる者でも、先の例(2) Bのような発話を、

(2') A : どこで会いましょうか?

B : ? 駅の前に立ちますので。

と単純スル形で済ませてしまう傾向がみられる。このような誤用は、典型的には例(2)のように未来のある時点で話し手と相手が再会することが前提となっている場面での発話によくみられるようである。このほか、同様の誤り(Bの発話)に、

(3) A : ちょっと荷物をとってきます。

B : ? はい。では、ここで待ちますから。

(4) A : では、またあとで会いましょう。

B : ? はい。では、図書館で勉強しますので。

のような例があるが、この場合、Bの気持ちとして「相手(A)が荷物をとってきた時には自分はここにいる」あるいは「相手(A)が図書館に会いに来た時には自分はそこで勉強している」というように、相手と再会する時点を念頭に置いて述べているものと思われるので、この場合、自然な日本語としては、

(3') A : ちょっと荷物をとってきます。

B : はい。では、ここで待っていますから。

(4') A : では、またあとで会いましょう。

B : はい。では、図書館で勉強していますので。

と進行のシテイルを用いるべきところであろう。

以上は未来時におけるシテイルについてであるが、過去の動作について述べる場合には、テンスがそのまま過去へ移行し、シタとシテイタの問題となる。この場合も動作の基準点があいまいな場合には、非日本語話者にはシテイタが使いにくい。次も学習者(B)の誤用例である。

(5) (Bが約束の時間に遅れて)

A : 遅かったですね。

B : ? すみません。友達の奥さんと話をしました。

このような場合、おそらく話し手(B)の気持ちとしては、その動作(話をする)自体は過去のことなので、単純タ形(シタ)で表したものと考えられるが、この場合も文脈上「(相手Aが私を待っている時に)私は話をしていた」という動作の基準点が念頭に置かれるべき発話場面であるので、ここでも自然な日本語としては、

(5') A : 遅かったですね。

B : すみません。友達の奥さんと話をしていました。

と進行のシテイタで表すべきところである。

2. 現在時の完了・未完了を表す場合

次に、外国人学習者の誤りやすいスル(シタ)とシテイルの選択として、動詞の形が肯定形か否定形かによって両形式が使い分けられる場合があげられる。たとえば、ふつう日本語では、進行を表すシテイルの場合、

(6) A : いま、テレビ見てる？

B : いや、見てないよ。

のように、肯定のシテイルに対して、その否定形は、シテイナイが対応する。

また、単純過去を表すシタの場合も、

(7) A : きのう、コンサートに行った？

B : いや、行かなかった。

のように、シタの否定形には、その単純否定(シナカッタ)が対応する。これらはごく規則的な肯定・否定の形式であり、学習者もさほど抵抗なく受け入れられるようである。しかし、シタが現在時における完了を表す場合は少し複雑になり、

(8) A : ごはんもう食べた？

B : いや、食べていない。

(9) A : ディズニーランドへはもう行きましたか？

B : いえ、行っていません。

のように、肯定のシタに対してその打ち消しは、ふつう「シテイナイ」と、シテイルの否定形が対応することになる⁴⁾。これは、形態だけみれば、単純過去の例(7)と現在進行の例(6)が融合した形ともいえる。そして、このような現在完了におけるシタの問いに対し、適切にシテイナイの形で答えるのも非日本語話者には難しいようで、彼らは往々にして(8)(9)のBのような場合、

(8') A : ごはんもう食べた？

B : *いや、食べない。

(9') A : ディズニーランドへはもう行きましたか？

B : *いえ、行きませんでした。

のように、単純ナイ形やシナカッタで表す傾向がある。(8')Bのような発話の理由として、おそらく話し手Bはその時点においてまだ食べていないので「食べない」と単純ナイ形を用いたと考えられるが、これでは事実を述べるというよりも「食べない」という意志を表す言い方になってしまい、相手の問いに対する答えとしては不自然に感じられる。また、(9')Bのような場合、相手Aが単純タ形(シタ)でたずねてきたので、それに引きずられて機械的にその否定形「シナカッタ」で答えてしまったものと思われる。

このように、日本語では、その動詞が現在の進行を表すのか、単純過去を表すのか、あるいは現在完了を表すのかによって、その認め方(肯否定)による文法形式がそれぞれ

〈シテイル↔シテイナイ〉 〈シタ↔シナカッタ〉 〈シタ↔シテイナイ〉 となって、その対立はかなり複雑である。したがって、これらの用法を指導する際には、個々の用法を他とはっきり区別して提示し、理解の定着を図ることが先決となろう。

3. 経験、経歴を表すシテイルとシタ

すでに藤井(1966)、吉川(1973)などに指摘されるように、シテイルの用法のひとつに、

- (10) a. 彼は3年前に東京の大学を出ている。
b. 父はいままで二度中国へ渡っている。

のように、いわゆる経験、経歴を表す用法がある。一方、これらは過去の出来事について述べているので、次のように、

- (11) a. 彼は3年前に東京の大学を出た。
b. 父はいままで二度中国へ渡った。

と単純タ形(シタ)で表すことも可能となる。上の例文(10)と(11)を比べてみても、文脈を問題にしなければ一応その自然さにおいて優劣はないといえる。このようなシテイルとシタとの使い分けは、われわれ日本語母語話者でもその判断が微妙な場合もあり、日本語学習者にとっても難しい問題となる。特にこのようなシテイルとシタで注意したいのは、その発話内容によっては、両形式間で異なった表現効果を生む場合があるという点である。

たとえば、日本語の論文などでよくみられるが、文中で他説を引用するような場合、その説自体はすでに(過去に)公表されているものであっても、

- (12) a. この点について林(19..)は、次のように述べている。
b. 渡辺(19..)は、そう考えている。
c. ……川端(19..)は、このように主張している。

のように、シテイルが使われることがある。この場合のシテイルなども、いわゆる経験、経歴を表す用法の一つと考えられるが、このようなシテイルには、そのこと自体はすでに過去に述べられたことであっても、それが現在でも有効であるかのように相手(読み手)に感じさせる一種の表現効果があるものと思われる。そして、そのことによって、書き手はより説得力のある論旨を展開させていくことが可能になるわけである。

一方、このようなシテイルも非日本語話者には使いこなすのが難しいようで、外国人学生の書いた日本語の論文を添削すると、上のような例を、

- (13) a. ?この点について林(19..)は、次のように述べた。
b. ?渡辺(19..)は、そう考えた。
c. ?……川端(19..)は、このように主張した。

のように、単純タ形(シタ)で引用してしまうケースがよくみられる。勿論それでも誤り

とはいえませんが、日本語話者からみると、論説文として少々淡白で説得力に欠ける引用の仕方に感じられる。

また、それとは反対に、同じ過去の経験を述べる際に、われわれ日本語話者は、意識的にシテイルを使うのを避け、単純タ形（シタ）で言い表す場合もある。それは、たとえば、次の例のように、自己の過去の業績や経験を控えめに述べたい時である。

- (14) a. 私はいままでいろんな国に行きました。
- b. 私はたくさんの作品を発表しました。
- c. 私は様々な賞をいただきました。

ちなみに、これらをシテイルで表すと、

- (15) a. 私はいままでいろんな国に行っています。
- b. 私はたくさんの作品を発表しています。
- c. 私は様々な賞をいただいています。

となって、人にそれを自慢しているような印象を与えかねない。この場合のシテイルも、過去の出来事をいわば発話時点にまで引き寄せて述べてようとする話し手の心理を反映しているものと思われる。これは学習のかなり進んだ学習者に時折みられることであるが、上のように自分の肯定的な経験を述べる際、別に威張りたい気持ちはなくても「経験＝シテイル」という固定観念があるためか、(14)のようにシタで表すべきところを(15)のようにシテイルを使ってしまい、不本意な印象を与えてしまうことがある。

このように、シテイルが経験、経歴を表すことに変わりはないわけであるが、その適切な使い方を学習者に身に付けさせるためには、シテイルの用法に始終するだけでは不十分で、上にみたようなシタとの微妙な表現効果上の違いを理解させることも重要であると思われる。

4. 表出的な文か報告的な文か

シテイルには、そのアスペクト的側面とは別に、出来事を客体的したり、報告的に述べたりする機能があることは、すでに大江(1975)、国広(1982)などに指摘される場所である。たとえば、同じ現在に起こっていることを述べる際にも、日本語では、

- (16) a. よく降るなあ！
- b. よく降っているなあ！

のように、スルでもシテイルでも表すことが可能である。

つまり、スル（シタも含め）とシテイルは、動作が完結的か継続的かというアスペクト的対立を基本とするが、その発話が表出的（主観的）か報告的（客観的）かによって、両形式が使い分けられる場合もある。そして、そのような場合のスルとシテイルの選択も、一般に非日本語話者には難しいようである。以下は、上級学習者の誤用例である。

- (17) a. (あくびをしながら) ? ああ、疲れてる！

b. (食事の前に) ? ああ、おなかがすいてる !

この場合、おそらく学習者の頭の中には「現在の状態=シテイル」という公式があるものと思われる。たしかに、シテイルには現在の状態を表すという用法があり、その意味では全くの誤りとはいえない。しかし、この場合、日本語母語話者であれば、シテイルとはせず、

(17') a. ああ、疲れた !

b. ああ、おなかがすいた !

のように、単純タ形(シタ)で表すのがふつうである。それでは、シテイルには決してならないかといえ、そうではなく、

(18) a. 山田さんは、疲れています。

b. この犬は、おなかがすいている。

のように第三者を主語に立てて述べる場合や、

(19) A : 元気ですか ?

B : ええ、まあ。ちょっと、疲れてますけど。

のように自己のことであっても、それを相手に伝える(報告する)形で述べる際にはシテイル形式をとる方がむしろ自然である。

このように、日本語では、事実としては同じ出来事、状態を表すにも、それを話し手が表出的に述べるか、報告的に述べるかによって、スル(シタ)をとるか、シテイルをとるかが決定される場合があり、その選択はかなり日本語のできる学習者にとっても難しいといえる。学習者のこのような誤用に際しては、スル(シタ)とシテイルについてのアスペクト的側面だけでなく、文の種類との関連からの説明付けも必要になると思われる。

5. 認知的な動詞について

最後に、語彙的な問題ともいえるが、「知る/思う/わかる/忘れる」といった認知的、思考的な動詞におけるスル(シタ)とシテイルの使い方について言及しておきたい。というのも、一般に、これらの動詞は他の動作動詞に比べてアスペクト的に特殊であり²⁰、また、その語尾形式と意味・用法において、個々の動詞がかなり個性的な振る舞いをみせるからである。

たとえば、「知る」という動詞が、

(20) A : 田中さんを知っていますか ?

B : いいえ、知りません。

のように、肯定的で〈シテイル↔シナイ(非シテイナイ)〉の対立を持つことや、あるいは「思う」という動詞が、

(21) A : わたしもそう {思う/思っている}。

B : あした会社を休もうと {思います/思っています}。

のように、現在を表すのにスルでもシテイルでも可能なことは、日本語教育の場でもよく指摘されるところである。このように、一般に、認知的、思考的な動詞は、そのアスペクト的用法がかなり特殊であるといえる。

また、「わかる」という動詞の使い方も難しく、日本語では、たとえば「わかりますか？」という問いに対して、

- (22) a. はい、わかります。
- b. はい、わかりました。
- c. はい、わかっています。

のように、一応スル、シタ、シテイルの3通りの答え方が可能となる。しかし、そこには微妙なニュアンスの差が存在し、文脈にもよるが、a（スル）では相手に同調している感じ（‘Yes, I understand.’）、b（シタ）では「了解した」というかしこまった感じ（‘Certainly.’あるいは‘Understood.’）、c（シテイル）では「すでに知っている」という感じ（‘I know it’）で、場合によっては相手に反発する気持ちを含むこともあり得る。

このように「わかる」という動詞は（その語彙的意味に由るものと思われるが）語尾形式によって微妙に異なったニュアンスを表すことがあり、その使い分けは、とりわけ外国語話者には難しいように思われる。

これは筆者もたびたび経験することであるが、日本語の授業中などで、教師（T）が学生（S）に話をしたあと、学生の理解を確認しようとして、

- (23) T : あすの授業は9時からです。いいですね？
- S : ? はい、わかります。

のような問答になるケースがよくみられる。このような場合、学生（S）としては、そのことを了解したわけであるから「はい、わかりました」とシタで表すべきところである。また、同様に、授業中の教師（T）と学生（S）のやりとりで、

- (24) T : この漢字の読み方はわかりますか？
- S : ? はい、わかっています。

のように、学生（S）がシテイルで答えることがある。これも全くの誤りとはいえないが、場合によっては、話し手（S）の意に反し、ぞんざいで丁寧さに欠ける印象を与えかねないので注意が必要である。

最後に、「覚える／忘れる」といった認知動詞についてふれておくと、これらも日常よく使われる動詞であるが、

- (25) A : あの人の名前を覚えていますか？
- B : いいえ、忘れました。

のように、語彙的意味は同類（反意語）であっても、通常、一方はシテイル、他方はシタの形で用いられ、その語尾形式にズレがみられる。このような動詞の使い方も外国人学習者には難しいようで、たとえば、英語話者の中には、母語の‘Do you remember…?’に

引きずられるせいか、(25) Aのような例を、

(26) *あの人の名前を覚えますか？

と、単純スル形で表してしまう傾向がみられる。

このように、日本語の認知的な動詞には、各動詞がそれぞれ独自のアスペクト形式や用法を持つものが多く、それだけ非日本語話者には適切に使いこなすのが難しいといえる。したがって、その指導に際しては、一般的な文法的規則のみならず、個々の動詞についての形式と意味、使い方を具体的に示していく作業が要求されることになる。

6. おわりに

以上、ここでは、日本語教育現場での筆者自身の経験もふまえ、外国人学習者に特に難しいと思われるスル(シタ)とシテイルの使い分けについて考察した。これまでみたように、日本語の(テンス)アスペクト形式はかなり複雑であり、同じ事象について述べるにも、文のタイプや肯定否定によってスル、シテイルが用いられたり、また、両形式間でそのニュアンスや丁寧さにおいて微妙な差異が存在することがわかる。そして、こうしたいくつかの要因がひとつひとつの言語使用場面に複雑に関係してくるため、かなり日本語のできる学習者でも、その適切な使い分けが難しくなるものと考えられる。

最後に、今回は誤用例の分類および分析を中心に試みたため、具体的な指導法にまで十分踏み込んで論じるまでには至らなかった。今後は、こうした考察を一つの足掛かりとして、スルとシテイルをより自然に使い分けられるような指導法についても研究を進めていきたいと思う。

注

- (1) いわゆる現在の完了・未完了を表す言い方には〈シタ↔シテイナイ〉のほかに、後に本論でも言及するように〈シタ↔シナイ〉の対立がある(寺村(1984)、日高(1995)などにもこの指摘がある)。しかし、本稿では、日本語教育的立場から、前者の方をより基本的な言い方としてとらえ、〈シタ↔シテイタ〉の対立を議論の中心に据えた。
- (2) 認知的、思考的動詞のアスペクト的特質については、高橋(1985)などに詳しい考察がある。

参考文献

- (1) 大江三郎(1975)『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂
- (2) 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文8』
- (3) 金水敏(1989)『『報告』についての覚書』仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティー』くろしお出版

- (4) 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」金田一春彦編 (1976)『日本語動詞のAspect』麦書房
- (5) 工藤真由美 (1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4
- (6) _____ (1987)「現代日本語のAspectについて」『教育国語』91
- (7) 国広哲弥 (1982)「人称の用法と構造」『言語学演習'82』東京大学文学部言語学研究室
- (8) 鈴木重幸 (1957)「日本語動詞のすがた (Aspect) について—～スルの形と～シテイルの形—」金田一編 (1976) 所収
- (9) 高橋太郎 (1985)『現代日本語動詞のAspectとテンス』秀英出版
- (10) 谷口秀治 (1997)「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92号
- (11) 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- (12) 日高水穂 (1995)「「マダ～シナイ」と「マダ～シテイナイ」」宮島達夫・仁田義雄 (編)『日本語類義表現の文法 (上)』くろしお出版
- (13) 藤井正 (1966)『『動詞+ている』の意味』金田一編 (1976) 所収
- (14) 吉川武時 (1973)『現代日本語動詞のAspectの研究』金田一編 (1976) 所収